

相撲力士双葉山

宇佐は、横綱（グランド・チャンピオン）という最高位に到達したプロの相撲の力士であった双葉山（本名穂吉定次、1912-1968）の故郷です。彼の最も傑出した業績は、相撲の勝負で 69 連勝を達成したことで、この記録は現在もまだ破られていません。双葉山は約 20 年間にわたって輝かしい戦歴を重ね、引退するまでに相撲のトップリーグで 12 回の優勝を果たしました。

双葉山は 1927 年に 15 歳で立浪部屋に入り、その後 10 年間でプロの相撲の階級を昇進していき、下位の力士の頃に横綱に勝ったことさえありました。有名な連勝は 1936 年に始まり、3 年近く続きました。双葉山は 1936 年に大関（チャンピオン）という 2 番目に高い位を獲得し、1937 年には第 35 代の横綱になりました。翌年に宇佐神宮で横綱への昇進を記念する特別なイベントが開催され、双葉山は上宮（上の社）の御祭神の前で象徴的な土俵入（闘技場へ入る儀式）を行いました。

1945 年に双葉山が引退した後、彼が力士として土俵で不利になるような二つの怪我を子どもの頃に負っていたことが、公に知られるようになりました。彼は右目が見えず、また家業であった漁業を手伝ったときに右小指の一部が押しつぶされていたのです。双葉山がこのような困難を乗り越えてきたという事実によって、彼の経歴は彼の支持者たちからますます賞賛されるようになりました。

双葉山は、自身の相撲部屋の長として力士を指導し、1957 年から没年の 1968 年まで日本相撲協会の会長として務めました。1999 年には、修復された彼の幼少期の家の近くに「双葉の里」という小規模の博物館が開館されました。博物館では、双葉山の生涯と経歴の詳細な年表や彼の試合のビデオ映像、横綱の正装をした双葉山の大きな像、華やかな化粧まわし（試合前の儀式で着用される、刺繍された大きな前掛けが付いた絹のふんどし）、多数の写真、資料、彼の私物などが展示されています。説明文のほとんどは日本語ですが、豊富な視覚資料のおかげで、宇佐の有名な横綱について知ることができます。